

井沢元彦

長編歴史ミステリー

卑弥呼伝説

地に降りた
神々



卑弥呼伝説 地に降りた神々

一九九五年六月三十日

初版発行

著者 井沢元彦

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(三五六二)二〇五一(編集
〇三(三五三五)四四四一(販売

振替 〇〇二一〇―六一三三六 一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル内

TEL 〇六(三二二一)一五七三

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

ISBN4-408-50270-7

©M.IZAWA 1995
Printed in Japan



JOY NOVELS

長編歴史ミステリー

卑弥呼伝説

地に降りた神々

井沢元彦

卑弥呼伝説 地に降りた神々／目次

プロローグ

5

第一章 神の密室

6

第二章 ヒムカとトヨ

29

第三章 吉野ヶ里の幻

70

第四章 岩戸神話の謎

94

第五章 アマテラスの正体

138

第六章 敵

177

第七章 出雲四柏手いずもしはくしゅ

219

カバードサイン／サン・プランニング
カバードサイン／塚本昇司

プロローグ

闇の中で一群の男女が踊っていた。

初めは、ゆるやかに、そして、激しく。

その中心の女が、いきなり着ているものを脱いだ。

どこからか不思議な楽の音が聞こえてくる。

女は女豹のような目を、神のいる場所へ向けた。

第一章 神の密室

まるで海鳴りのように遠くで音がした。

その音は次第に大きく強く耳の底で響いた。

意識の混濁の中で、音は明確に形を取りつつあった。

その時、永源寺峻は目を覚ました。

電話が鳴っている。その隣に置かれたデジタル時計は、闇の中に二時という時間を告げていた。

峻が受話器に手を伸ばした時、意識はまだ完全に戻っていなかった。

——はい。

寝ぼけ眼で返事をした峻の耳に、心をしめつけられるような、かぼそい声が聞こえてきた。

——ヒミコは殺された。

——うん？

とっさに相手の言うことが理解できなかったが、声に聞き覚えはあった。

——日向か、どうしたんだ？

答えはなかった。その代りに信じられないほどの苦しげなうめき声が聞こえた。

峻は今度こそ完全に目を覚ました。

——おい、どうしたんだ、おい、しっかりしろ。

返事はなかった。

峻は跳び起きて、もう一度呼びかけた。しかし、電話はつながっているのに、何の返事もない。受話器の向う側には無気味な静寂があるばかりだ。

ほんのわずかな躊躇の後、峻は一度電話を切って

警察にかけ直した。

——友人の様子が変なんです。見に行つて頂けますか。私は——。

峻は手短かに依頼すると、急いで着換え、車のキーを持って部屋を飛び出した。

日向忠太^{ひゅうがちゅうた}の死体は東京世田谷区太子堂の閑静な住宅地にある奇妙な一軒家で発見された。

発見したのは峻の通報を受けて駆け付けたパトロールの警官である。

それはまったく奇妙な家だった。いや、家というより神社といった方が正確かもしれない。鳥居をくぐると石畳の道がわずかに続き、真新しい杉の板で作った神殿形の建物が建っている。階^{きざはし}があり、周囲は濡れ縁^{ぬれえん}で囲まれている、床の高い木造の建物だ。屋根は瓦^{かわら}ぶきで屋根の中央の盛り上がった部分には銅の宝珠^{ほうしゆ}がある。

ただ、よく見ると、いわゆる神社の社殿とは少し違って、正面の入口が観音開きの扉ではなく、引戸^{ひきど}になっている。両側の壁にはガラス窓がある。ただしカーテンが引かれ中の様子は見えない。

若い警官はパトカーを降りるとすぐに鳥居をくぐって、その建物を目指した。通報によって、それが神社ではなく人の住む家であることは知らされていた。彼はまっすぐに階を上って、正面の戸をノックした。

「日向さん、日向さん、大丈夫ですか」

声をかけると同時に、引戸に手をかけてみたがまったく動かない。

返事がないので警官は濡れ縁を右へ回って、ガラス窓を叩いた。分厚いカーテンを通して中から光が漏れている。

返事はない。

警官はふと、左の隅のカーテンが少しずれているのに気が付いた。ほんの一センチほど隙間^{すきま}があつて中をのぞくことができる。

のぞいてみて警官は思わず叫び声をあげた。

八畳ぐらゐの広さの板敷の床の中央に、白い単衣ひとえに袴はかまをつけた男が、仰向けに倒れていた。左手には電話の受話器を握りしめている。そして、右手は胸元にあり白い矢羽のついた矢を握りしめている。

その矢は男の胸にしっかりと突き刺さり、男の衣は暗紅色の血に染まっていた。

警官は泡を食って、急いでパトカーまで走ると、無線で応援を頼み同僚を伴って戻ってきた。

「ねえ、先輩、死んでるでしょう」

若い警官は和田といった。その二年先輩の江藤は、ガラス越しに見て、やはり死んでいると確信した。だが、たとえ生存の可能性が万に一つもなくとも、このまま応援の到着まで手をこまねているわけにはいかない。

「中へ入るぞ」

江藤は宣言して、警棒でガラスを叩き割り、掛け金はずして中に入った。そして、引戸を中から開けて和田を招じ入れた。引戸には錠はなく、ただ内

側から心張り棒がかけてあるだけだった。江藤はそれをはずしたのである。

和田が中に入った時、江藤はもう男の脈をとっていた。

そして首を振った。

「だめだ、完全に死んでいる」

そう言って江藤はきよろきよろとあたりを見回した。

部屋は八畳一間ぐらゐの広さで、ほとんど家具らしい家具はない。ほぼ中央に和机があり、その上には電話機と電気スタンド、開いたノートとペンが置かれているだけ、あとは本棚に大量の書物が積みまれている。普通の本だけでなく和綴わとじの古文書も多数ある。そして隅の方に布団ふとんがたたんで置かれている。

天井からの蛍光灯で部屋は明るいが、それだけに家具の少なさが目立つ。

江藤はまるで人を捜すような視線をしていた。和田は不思議に思った。他には誰もいないのに、なぜそんな目をするのか。

「先輩、どうしたんです」

「おかしいと思わないか」

「えっ？」

「この矢、誰が射ったんだ」

「犯人でしょう」

和田は言った。

「じゃあ、どこから？」

「――！」

江藤にそう言われて和田は初めて気が付いた。

「密室だって」

警視庁捜査一課の富沢警部は初めてそれを聞いた時、馬鹿馬鹿しいようなあきれ返ったような気分になった。

「どうということなんだ」

車を降りて富沢は、一足先に着いていた部下の佐々木警部補に尋ねた。

佐々木も当惑顔で、

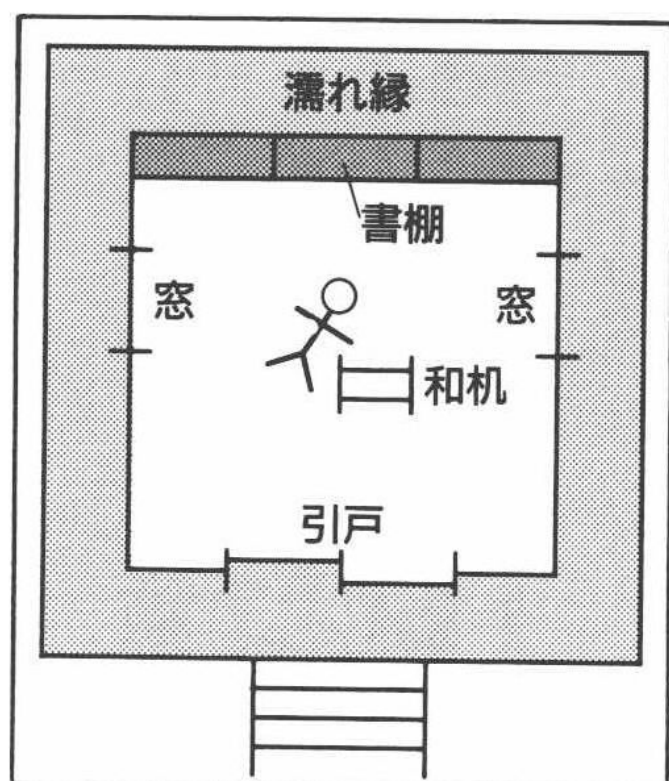
「とにかく見て下さい」

と、先に立って現場に案内した。

死体はそのまま転がっていた。

その胸には矢が突き刺さっている。

富沢は部屋を注意深く観察した。いま入ってきた戸口のほかは出入口はなく、入って左右の壁には窓がある。右側の窓のガラスは割られている。現場の状況を図示すると、左のようになる。



「第一発見者はパトロールか？」

「はい、外勤の和田巡査です。その前に通報がありました」

佐々木は答えた。

「通報？」

「ええ、被害者の友人で永源寺峻という若い男です」

「どんな通報だ」

富沢は身を乗り出した。

「この様子がおかしいから調べてくれ、というものです。本人、来てますよ。被害者の身許を確認してもらいました」

「被害者の名は」

富沢の問いに佐々木は手帳を取り出した。

「日向忠太、三十二歳、職業は古代史研究家ということですが」

「家族は？」

「独身で、郷里の宮崎に両親がいるそうです。連絡は済ませました」

「その男に会うか、永源寺とかいう」

「こちらです」

佐々木はいったん外へ出た。富沢もあとに続いた。永源寺峻という男は、外で待っていた。九月とはいえ、ことしはまだ十分に暑い。その男はポロシヤツにスラックス、スポーツシューズという軽装だった。背は高く瘦せて、浅黒く日に焼けている。

「捜査一課の富沢です」

「永源寺です」

峻は軽く頭を下げた。

表情は暗く、声も元気がなかった。

「あなたが110番通報して下さったそうですね」

富沢は手帳を取り出して質問した。

「ええ」

峻はうなずいた。

「そここのところの事情を詳しく話して下さい」

「ぼくにもさっぱりわからないんです。ただ、一時間ほど前に、ぼくのところへ電話がありました、一言だけ話したあと、苦しそうなうめき声をあげて話

がとぎれたんです。電話を切ったわけでもなく、電話口の向う側で急に倒れたような感じだったので、一度電話を切って110番通報したわけです」

峻は説明した。

「それは二時頃ということですか」

「ええ、ベッドサイドの、電話のすぐ近くに時計が置いてありますので、確か二時ちょうどぐらいでした」

「急に倒れた、とおっしゃいましたが、その時被害者は矢で射られたんだと思いますか」

富沢は肝心な点を聞いた。

峻は首を振った。

「いえ、別に悲鳴を急にあげたという感じでもなかったし、ぼくは何か体の調子が悪くなつて倒れたように感じましたが」

「じゃ、119番の方がよかった？」

「そうですね、ただ、彼は御覧の通りの変り者で、一人暮らしですし、警察の方がちゃんと調べられると思つたんです」

「なるほど、それで先程被害者と話したと、言いましたね、それはどんな内容です」

峻は困つたように、

「それが正確に言うとは話はしていないんです」

「会話はしていない？ それはどういうことです」

「彼はまずこう言いました。ヒミコは殺された、と」

「ヒミコ？ いきなりそう言つたんですか」

富沢は驚いて言つた。

「ええ」

「名前も名乗らずに？」

「ええ、そうです。あいさつもなしに、いきなりです」

「それでよく被害者だとわかりましたね」

不審気な富沢に、峻は弁解口調で、

「彼とはよく電話で話していましたが、あの時間に電話してくるのは、彼ぐらいのもんですから」

「そうですね、ヒミコねえ、ヒミコつてお知り合いですか？」

この質問には峻もさすがに苦笑して、

「いえ、現代の人じゃなくて、歴史上の人物。あの邪馬台国やまたいこくの女王卑弥呼ひみこのことじゃないでしょうか」
「卑弥呼、ああ、そうか。しかし、卑弥呼って殺されたんですか」

「——それは、ぼくは古代史にはあまり詳しくないのですが、少なくとも学界の定説では自然死ではなかったでしょうか」

「ほう、じゃ、卑弥呼が殺されたというのは新説ですか」

「ううん、そう言い切れるかどうかは、調べてみないとわかりません」

「その、ヒミコが殺された、と、被害者はまず言っただけですね」

「そうです」

「それから？」

「少し寝ぼけてはいたんですが、なにしろ直前まで寝ていたものですから『日向か、どうしたんだ』と言ったと思います」

富沢はうなずいて先をうながした。

「それだけです」

「それだけ？」

「ええ、苦しそうなうめき声が聞こえたかと思うと、それっきりでした。あとはいくら呼びかけても、返事がありません」

「それで警察に通報した？」

「その通りです」

それを聞いて富沢はしばらく首をひねっていたが、

「奇妙なお話ですね。そうすると被害者は胸に矢が刺さっているという極限状況で、110番でも119番でもなく、あなたのところへ電話をかけた——」
峻はうなずいた。

「そのうえ、犯人の名前どころか自分の状態すら言うことなしに、ただ、ヒミコのことだけ言った」

「確かに変ですね、でも、ぼくは嘘は言ってませんよ」

峻は別に興奮もせず淡々と言った。

「いや、お気を悪くなさらないで下さい。しかし、どうして被害者はそうしたんでしよう」

「——そうですね、おかしいといえはおかしい。でも、彼は古代史研究に命を懸けてましたから」

「職業は古代史研究家ということですね、これはあなたが？」

「ええ、警察の方に申し上げました」

「どんな職業なんですか、具体的には」

「フリーの学者と言いましようか、どこかの組織や大学に属するというのはなく、自由な立場で研究し、時々それを著作の形で世に問うとでも言いましようか」

「つまり著述業？」

「まあ、そうです。でも彼の本はあまり売れてはいませんが」

「じゃ、生活は苦しかったですか」

富沢は意外な顔をした。

家具などは少ないが、なにしろ都心の住宅地である。土地の価格だけでも相当なものだ。

「いえ、そんなことはないでしょう。あれだけの研究室があり、別棟もあるし、資産は相当なものです。実家からの仕送りもあったと思いますし」

「別棟？」

「ええ、あそこじゃ生活できないでしょう。トイレも台所もないし、風呂場もない」

峻に言われて、富沢は初めて気が付いた。

「じゃ、あれは書斎のようなものなんですか」

「ええ、夢中になって徹夜することもあるようですが、ここは住居じゃありませんから」

「住居というのは、どこです？」

峻は「書斎」の方を指さした。

「あの裏の林を抜けると二階建のアパートがあります。その二階の奥の部屋がそうです」

「アパート住まい？」

「いえ、他の部屋は人に貸してますけど、彼はあそこのオーナーなんですよ」

峻は説明した。

富沢はちよつとびっくりしたように、

「日向さんってのは相当なお金持なんですね」

「いえ、正確に言いますと、父親が金持なんですよ」

「ほう、お父さんはどんなお仕事を」

「地方の名家で、素封家で、新興宗教の教祖なんです」

「新興宗教？」

「ええ、神道系で、太陽降臨教（こうりんきょう）とかいった名でしたね」

「太陽？」

「ええ、天照大神（アマテラスオオミカミ）が信仰の対象のようですね」

「アマテラス？ はあ、すると、あの建物も」

「ええ、もとは古い神社を買い取って拠点にしていたんですがね。彼がそのうちに神殿をつぶして自分の書齋にしまいました。信者を追い返してしまったりで、いまではまったくふるわなくなっていました」

「そうですか」

富沢は要点をメモしながら、

「ところで、永源寺さん、あなたの御職業は？」

「ぼくですか、ぼくは、トレジャー・ハンターと称してますがね」

「トレジャー・ハンター？」

「ええ、日本語に訳せば、宝探し人といったところかな」

「それが、商売というか、その——」

「ははは、職業として成り立つのか、とおっしゃりたいんですね。もちろん採算がとれないことがほとんどです。でも、まあ、株の取り引きをしたりして、生活には困ってません」

「結構な御身分ですな」

うらやましそうな顔で富沢は続けた。

「——で、日向さんとかかわりは？」

「友人です。前に、彼の本を読んだことがあって、偶然知り合いました。彼は電話魔でね、よく夜中過ぎにかけてくるんですよ」

「どんな内容です？」

「主に古代史のことでしたね。門外漢のぼくにはよくわからないのですが、新しい発見だとか、驚天動地の新説だとか、元宗教家だけに言い方が大げさんんですが」

「最近、電話があつたのはいつです？」

「一週間ぐらい前じゃないですか、その時も深夜でした」

「内容は？」

「相変らず古代史の話ですよ。太陽信仰こそ古代史の謎を解く鍵だとかね」

「誰かに憎まれているとか、狙われているとか？」

「そんな話は一切ありませんでした」

「犯人の心当りがありますか？」

最後に富沢はそれを尋ねた。

「いえ、まったくありません」

峻はきっぱりと否定した。

「それじゃ、疑われたんじゃないの？」

マンションの峻の部屋で、和服姿の中尾真実子が言った。

真実子は二十代ながら、香道三阿流さんありゆうの家元代理をつとめる、やり手の美人である。

「なんとなく、うさんくさいとは思ってただろうな」

ソファで手足を伸ばしながら、峻はあきらめ口調で答えた。警察はどうしても自由業者にはつめたい。

真実子はコーヒを峻の前に置いて、自分も向い合わせにソファに座った。

「それで、犯人の手がかりは？」

「まったくなし。なにしろ密室殺人だからね。犯人は煙のように消えたことになってるんだから」

「でも、ミステリーの世界じゃあるまいし、現実起こった事件でしょう。本当に密室なの？」

「ああ、週刊誌読まなかったのか、大騒ぎだ」

実際、峻はマスコミやテレビからインタビュの申し込みが殺到し、いささかげんなりしていた。